

『マツタケ』のさきへ

赤嶺 淳 一橋大学大学院 社会学研究科教授

今号は、2025年度に開講した先端課題研究23「〈面白い〉研究の研究——規格不能性と向きあう」についての特集です。

先端課題研究とは、社会学研究科が大学院重点化された2000年度にはじまったプロジェクト型講義科目です。教員と博士課程の学生とが、現代のかつ先端的研究課題について、専門分野(ディシプリン)を越えて取りくむとともに、共同研究という行為を通じ、研究と教育の融合をめざしています。

記念すべき第1陣は、政治学者の渡辺治先生が組織された「企業社会日本の変容」でした。同研究の成果は『変貌する〈企業社会〉日本』と題して旬報社から2004年に出版されています。

その系譜の23番目につらなるわたしたちは、2024年度に採択された科研費(挑戦的研究・萌芽)「ノンスケーラビリティ再考——不安定で不確定な現代社会に資する人文社会学の構築」(24K21385)を母体としています。

課題名から想像できるように、科研にしろ、先端課題研究にしろ、着想の多くをアナ・チンさんの『マツタケ』に負っています。20世紀に誕生した社会科学は、右肩あがりの経済を前提としています。しかし、地球の有限性があきらかとなり、グローバルに低賃金競争が展開されるようになった今日、その前提——よりよい明日(a better tomorrow)——が幻想にすぎなかったことに、わたしたちは気づいています。そうであるならば、不確定な現実を直視した社会科学を再構築すべきではないか、と同書は問題提起しています。

これは、まさに慧眼というほかありません。発生自体が不確定なマツタケを軸として複数種間(マルチ・スピーシーズ)の応答をマルチ・サイテッドに描いてみせたのは、そうした社会科学を再構築するための手法のひとつ、としてチンさんが期待を託したもののなのでしょう。

2025年7月におこなわれた第27回参議院選挙において、新興政党が躍進した要因として、経済政策から外国人政策にいたるまで、さまざまな世代がそれぞれに抱える「不安」であったことを指摘する識者は少なくありません。それらの不安を汲みとった、わかりやすい政策に票があつまった、というわけです。

たしかに、そうした不安を受けとめるのが政治であり、分野を問わず、そうした不安をやわらげる研究も必要です。しかし、その不安の根源たる『「不確定性／不確実性」を内包する社会科学』とは、いかなるものなのでしょう？

チンさんの真似をしてもはじまりません。第一、そんな二番煎じこそ、チンさんに「スケラブルな研究なんて、おもしろくないでしょ」と一蹴されるにちがいありません。チンさんが示した方向性と方法論を、わたしたちなりに深めていくことが、科研の目的です。もちろん、わずか2年半の研究期間で、そのような大問題を解決できるなどとは、考えていません。それでも、一歩でも、二歩でもいいから、目標にちかづこう、という希望を託したのが先端課題研究だというわけです。

同僚とはいえ、どのような動機から、いかなる研究を構想しているのかについて知る機会は少ないものです。異分野を専門とする同僚の試行錯誤から相互に学び、わたしたち自身の成長の場としたいと思います。その過程を講義という形式で提供することで、今後、自分の学門を確立していく大学院生にも、先行研究をなぞるスケラブルなものだけではなく、オリジナリティあふれる研究を構想する契機にしてもらいたい、と願っています。

共同研究会の第1回目は、趣旨説明もふくめ、発案者のわたしが担当いたしました。その概要については、本誌に収録した辛承理による「不確定性への応答——資料に出会い、現場に学ぶ」をご覧ください。受講生のそれぞれが、わたしの報告なり、『マツタケ』なりを、いかに評価し、自身の研究と向きあおうとしているかについては、人文社会学における『マツタケ』の位置づけをはかるモノサシとなりうるはずです。

どこを起点とするかにもよりますが、はやいものです。修士課程を修了して33年がたちました。博士課程をおえてからでも28年がすぎています。そのときの関心に応じてアジアから太平洋、はてはヨーロッパにいたるまで、さまざまな場所を歩いてきましたが、現役生活も残すところあとわずかという段階にいたって、ようやく腰を落ちつけて「やるべき仕事」が見つかった気がしています。8年遅れの「知命」というわけです。

知命のすべては、2015年10月に『マツタケ』に出会ったことによっています。研究会報告でも強調したことですが、翻訳にあたっては、チンさんが歩いた景観を追体験しながら、彼女の視点・方法論を盗むことに決めていました。最初の2年半は、米国、フィンランド、中国のマツタケ山を歩いては、あらたな人に出会い、マツタケを食べたりと、実に楽しいことの連続でした。

そんな環境が一転したのは2018年の初夏でした。翌年10月に長野県諏訪市で

1992年にカンボジアから難民としてやってきてマツタケ狩りとなり、1995年に仲買商となったSさん(2017年11月、Cave Junction, ORで筆者撮影)。



開催される「第10回菌根性食用きのこに関する国際ワークショップ」(The 10th International Workshop on Edible Mycorrhizal Mushrooms)の基調報告者として来日するという連絡がチンさんから届いたのです。

その連絡が「それまでに日本語版は出版されているよね?」という確認であったのは、いうまでもありません。もちろん、大学院の講義であつかい、メモは作成していました。また、きのこ類・菌類に関する基礎的な勉強はおえていました。彼女が引用している文献で日本語になっているものは、ひととおり集めていました。あとは、あの詩的で教養あふれる難解な英文を日本語におきかえる作業だけという状況にありました。

しかし、その作業こそが、もっとも難航をきわめるものでした。2018年の年末から2019年の年始にかけては、当時、名古屋にあった自宅にひきこもり、ひたすらパソコンに向かっていたことしか記憶にありません。夢のなかでも翻訳していたことを思い出します。

こうした翻訳の裏話を紹介したのは、ほとんど指摘されることのない『マツタケ』の一面を紹介するためです。まず、原著が出版された2015年9月末の米国を想起してみてください。当時、米国は大統領選挙の予備選挙中でした。トランプ氏が出馬を表明したのは、その3カ月前のことでした。その1年後にかれは共和党の大統領候補の指名をうけるわけですが、予備選挙中はもちろんのこと、本選挙中においても、米国出身の友人たち——イエール大学やシカゴ大学など名門大学で学んだ人類学者や社会学者たち!!——は、「トランプ? あんなヤツが勝つわけないだろ」と断言していたものです。

日本のメディアも同様の論調でした。ところが2017年1月にトランプ氏が第45代大統領に就任した途端、メディアはそろって産業の空洞化によって経済が地盤沈下したラストベルトの苦境を報道しはじめたのです。そこで見聞したことは、『マツタケ』のキーワードのひとつ「不安定な状態にあること」(プレ

マツタケが発生する、ダグラス
ファーの商業伐採跡地(2017
年11月、Cave Junction, ORで
筆者撮影)。



カリティ)そのものでした。

もちろん、同書は米国社会を論じたものではありません。しかし、随所に米国批判が散見できます。たとえば、ジョージ・W・ブッシュ大統領(いわゆる子ブッシュ)の副大統領として力をふるったディック・チェイニー氏も登場します。それまで米国といえば、いくつかの都市しか訪問したことがなかったわたしには、チンさんがチェイニー氏を登場させる意図が理解できませんでした。

2018年12月、そのチェイニー副大統領を主人公とした映画『バイス』(アダム・マッケイ監督、パラマウント映画)が米国で公開されました。そのころ翻訳に四苦八苦していたわたしは、迂闊なことに『バイス』の存在はおろか、それが第91回アカデミー賞を受賞したことなど、知るところではありませんでした。

その映画にめぐりあったのは、2019年4月、ベルリンに向かう機中のことでした。復路でも2回観ましたし、さいわい立川の映画館でレイトショーとして上映されていたので、帰国後に何度も足を運びました(日本での公開は4月5日だったようです)。この映画のおかげで、ようやく『バイス』が描いたような9.11からイラク戦争へ突きすすんだ、マスキュリンな世界こそが、チンさんの批判しなかった米国なんだと理解できました。その系譜はベトナムまで辿ることができます。

晴れて翻訳から解放され、「さあ、これから!」という矢先、世界はCovid-19に覆われ、それまでの日常生活が一転してしまいました。「明けない夜はない」(“The night is long that never finds the day.”)の格言どおり、いくら時間がかかろうとも、「歩けない苦しみ」は、いずれは解消されるわけです。

その日を待望する過程で、偶発的ながらも貴重な体験をした、と考えています。それは、マスク警察などの過剰な自警団的同調圧力や、「神風」頼みの、非科学的政策を思いつきで強行する政府、そのアドホックな対応を検証すらせず、総

理大臣以下高級官僚のだれも責任をとらない現実をまえにして、戦前から変化できていない「日本」という国家／社会の体質を再確認できたことです。

チンさんが批判する米国的マスキュリニティとは異なるものの、日本社会の根底に潜んでいる構造／問題に気づかされたのです。これはプレカリアスな状態だからこそ、顕在化したわけで、いい教訓となりました。

他方で「歩けない楽しみ」にも気づくこともできました。歩けない以上、選択肢はただひとつ。研究室で読むことだけ、でした。一寸の先さえ見通すことができないことが、いかに「不安定な状態」であったことか!! なにかにすがらないと、精神的な安定を失ってしまいそうでした。勉強がしたかったというわけではなく、あの環境で「できること」といえば、勉強しなかった、というのが正直なところですが。でも、そのおかげで、「やるべき仕事」が見えてきたわけです。「怪我の功名」とでもいうべき、偶発性のきわみでしょう。

その仕事とは、「捕鯨問題群の研究を深めることによって、富国強兵・殖産興業のスローガンのもと、近代化を追求してきた日本国家の成りたちを解明すること」です。

この表現は、コロナ禍の2021年1月にまとめた文章の一節です。出典元は、当時運営していたウェブページ「ナマコ研究室」(Balat's Office)のトップにかかげたあいさつ文です。編集委員会の了承を得て、その文章を本号末に再掲いたします。チンさんの問いかけに対する、現時点でのわたしの応答は、「ディシプリンではなく、イシュー(問題)に着目する」ということです。今回おこなった研究発表もその一部ですが、捕鯨問題群というイシューの分析を通して、日本だけではなく、世界が経験してきた近現代史を読みなおし、これからの地球社会を展望する、という作業です。捕鯨業史研究の射程は、「鯨食の是非」に矮小化されるべきではありません。捕鯨業の本丸である鯨油に踏みこんでこそ、見えてくるものがあるはずですが。この試みの妥当性については、現在、執筆中の新書『クジラとオランウータン』(仮)で判断ください。

無謀な挑戦かもしれません。それでも、コロナ禍以来、文献に埋もれながら、多数の発見や出会いを経験してきたなかでの決意でもあります。わたしにとって〈面白い〉こととは、「こうすれば、こうなる」というスケラブルな道筋をなぞることではありません。そうではなく、なにが起こるかわからない——ノンスケラブルな——道で遭遇する凸凹を乗り越えていく、ドキドキ感にあるようです。そうした〈面白さ〉を堪能しつつ、その躍動感を読者とわかちあえる文章を綴ることが責務だと会得したところです。

先端課題研究23「〈面白い〉研究の研究——規格不能性と向きあう」
第1回研究会報告の概要と批評

不確実性への応答 ——資料に出会い、現場に学ぶ

辛 承理 一橋大学大学院 社会学研究科 博士課程

本研究会は、科学研究費挑戦的研究(萌芽)「ノンスケーラビリティ再考——不安定で不確定な現代社会に資する人文社会学の構築」(24K21385)の一環として企画されたものである。

第1回研究会は2025年4月23日(水)15時から17時に、マーキュリータワー5階3509で開催された。初回ということもあり、研究会の趣旨と進め方についての確認がなされたうえで、研究会代表者のひとりである赤嶺淳が研究報告をおこなった。

本稿では、赤嶺報告およびそれに続く討論を、筆者の視点から整理しつつ、自身の研究を踏まえて批評したい。

1. 研究の「面白さ」は言語化できるか？——赤嶺淳

「研究の『面白さ』は言語化できるか？——〈面白い〉研究の研究規格不能性に向き合う」と題された報告では、アナ・チンの『マツタケ』から学ぶ¹⁾、現代に必要とされている人文社会学とは何かについて自身の研究を事例として報告がなされた。

研究会の趣旨

研究においては方法論が重要であるが、それ以前に、いかなる問題意識をもって研究を構想するかが重要である。そこにおける研究の〈面白さ〉とは、作品を制作する研究者自身が体感できるものである。

一橋大学は個人研究に没頭できる恵まれた環境がある反面、周囲の研究者が互いの研究内容や関心に触れ合う機会が少ない。それぞれが異なる分野や世代であるからこそ、感じている研究の〈面白さ〉は多様である。

本研究会は、この多様な〈面白さ〉を共同研究として議論することで、人文社会系の学問と本学における研究の活性化を図ることを目的として組織されたものである。

『マツタケ』からの学び

赤嶺は、自身の研究の出発点について、学部時代に出会った鶴見良行との出会いを挙げた。鶴見が実践してきた「モノ研究」とは、ひとつの食材を手がか

りとして、そのサプライチェーンを追っていく方法論である。

2017年に出版された『鯨を生きる』では²⁾、鯨食を中心とした鯨人6名の個人史を聞き書きし、『朝日新聞』と『読売新聞』など4大新聞の分析を組み合わせた研究である。赤嶺は、この著作を振り返り、鯨食を中心的な議論としたことへの反省を語っていた。とくに、戦前戦後直後の新聞を分析するなかで浮かび上がってくる「鯨油」の外貨獲得資源としての役割について、考察できなかったことが課題として残っているという。

たとえば、戦前に日本で初めて南極海に捕鯨船を派遣したのは、現在の日本水産(ニッスイ)であり、当時は鮎川義介が率いていた日産コンツェルンの水産部門にあたる。日産コンツェルンは、満州の大豆や朝鮮半島のイワシ油などを加工する日本油脂という別会社まで持っており、広範な油脂産業を展開していた。こうした財閥が、なぜ南極に捕鯨船団を派遣したのか、その意義と意味について議論できなかった点を、自身の研究上の課題として改めて位置付けたと語った。

そのころ、赤嶺が並行して取り組んでいたのが、アナチンの『マツタケ』の翻訳であり、チンの問題意識のスケールの大きさや構想力に深い衝撃を受けたという。

『マツタケ』は多様な示唆を与える著書であるが、赤嶺自身はその学問的貢献について、「不確定な21世紀を生きるわれわれに、どのような社会科学が求められるのか」を読者に問いかけている点にあるという。そのひとつの方法として、チンは、マツタケとマツ類、岩石などの複数種間関係(multi-species relationship)に着目した。赤嶺は人間中心主義を否定しながらも、複数種間関係ではなく、古典的な「鯨類と人類の関係性」の変遷に着目して「近代」を再考しようとしている。

マーガリンの社会史

赤嶺は近代を「資本蓄積を目的とした収奪型経済からプランテーション経済へ移行する過程」ととらえている。そのうえで、着目しているものが1869年に発明されたマーガリンである。

産業革命を契機として潤滑油に使用されるようになった鯨油は、蠟成分が含まれた齒鯨類のもので人間が摂取できない性質のものであった。20世紀、マーガリンの原料となった鯨油は、鬚鯨類から搾油されたものであり、人間が消費できるものである。

マーガリンは自然物である牛乳から生成されるバターの代用品として人工的に作られたものであり、20世紀初頭以降にヨーロッパで爆発的に消費されるようになった。

20世紀初頭に液体油を固形化する技術がドイツで発明され、液体の鯨油をマーガリンや固形石鹼の原料とすることが可能となる。固形石鹼の場合には、その過程で副産物であるグリセリンが分離され、それを加工するとダイナマイトの原料であるニトログリセリンができる。こうして、鯨油は世界商品として利用されてきた歴史を持つ。

しかし、1960年代、IWC（国際捕鯨委員会）の管理強化をうけて世界の鯨油市場が崩壊するにつれて、東南アジアではアブラヤシのプランテーションが、ブラジルでは大豆のプランテーションといったように油糧植物の栽培が拡大していく。こうした傾向を、赤嶺は「収奪型経済の典型例である捕鯨から、アブラヤシや大豆という新たな油脂資源のプランテーション経済への移行」と読みとっている。この油脂間競争の変容が現在の赤嶺の研究課題であり、将来的にはマーガリンの社会史の執筆を目標しているという。

ふたたび、鶴見良行の話に戻ると、鶴見が着目したバナナというのは非常に身近な商品であり、そこから日米比の三カ国間の関係を描き出したことを、赤嶺は「卓越した着眼点であった」と評価していた³⁾。それに比べ、鯨肉は現代日本においては日常的なものではないが、油は身近なものである。だからこそ、今はなき鯨油に着目することは、鶴見の「身近なモノを通して世界を読み解く」モノ研究の姿勢を、今日的に継承することをめざすという。

江戸期日本の漂流民と捕鯨船

鯨類でもなく、捕鯨でもなく捕鯨問題の研究者を自称する赤嶺は、捕鯨を通じて日本の近代を捉えなおす作業を目論んでいる。マーガリンの社会史構想もその一貫である。研究発表では、近代の端緒となる開国研究について紹介した。

一般に、ペリー来航は日本近海で海難事故にあった米国の捕鯨者の保護をもとめていたことになっている。しかし、赤嶺の問いは、そうした通説的な理解に対して、「本当のところは、どうなのか？」という疑問から出発している。そこには、戦後日本における、国際関係を日米関係だけで考える傾向に対する批判的視点が問題意識の根底にある。そこで万次郎のような日本の漂流民に着目している。

万次郎は足摺岬で生まれ、数え15歳で鳥島に流され、米国の捕鯨船ジョンハウランド号に救われる。この出来事が偶発的なものであったのか必然的なことであったのかを問いなおす過程で、赤嶺はふたつの発見を得たと語っていた。

まずは、2025年3月に万次郎の生誕の地である足摺岬を訪れた際、その切り立った崖の地形から沿岸捕鯨を成り立たせた条件に気づいたという。黒潮に沿って鯨類が回遊するだけなら、湘南でも捕鯨業が成立してもおかしくないが、実際には湘南では捕鯨業が成立しなかった。足摺岬や太地など、太平洋側で古式捕鯨をおこなわれていた地域には、沖を回遊する鯨を見るのに適した遠見が可能となる地形が共通的に存在していた。黒潮という鯨類が回遊する条件が存在することも捕鯨業の成立には必要であるが、実はもうひとつの生態的／地形的条件が不可欠であったことを発見したという。

ふたつめは、太平洋漁場における国家の多元的関係性である。1819年、ジャパングラウンド（日本漁場）が発見されたのは、ボストンの商船が広東からハワイに航海中に日本近海でマッコウクジラの群れを発見したことに由来する。その商人はハワイ諸島に自生した白檀を広東に輸出したり、あるいは北米大陸の北西海岸でラッコの毛皮を先住民から入手したりしていた人物であった。

ジャパングラウンドが絶頂期であったのが1820年～1840年代であり、その過程で1835年にはアラスカに北太平洋漁場が開発されていく。1841年に漂流した万次郎が捕鯨船に救出された背景にも、こうした背景が影響している。

しかし、これまでの研究では太平洋の漁場は日米の単線的なとらえ方で、ジャパングラウンドのみが語られていることの危険性を赤嶺は指摘している。より北方のカムチャッカやオホーツクの漁場など、日露関係や英中アヘン戦争など、太平洋の覇権をめぐる争いから漁場の進出と外交関係の繋がりを多元的に分析する必要性を強調していた。

2. 鯨油を起点とする歴史の読み替え——質疑応答から

質疑応答のなかで最も活発に議論が交わされたのは、歴史をとらえる際のふたつの見方についてであった。ひとつめは、あらかじめ社会構造があり、その結果として個々の出来事が生じるという立場。もうひとつは、偶発的な出来事の積み重ねが結果として社会構造をかたちづくる、という視点である。従来の日本の戦後歴史学は前者にあたり、社会構造から歴史を読み解く立場であった。これに対して、赤嶺は、「偶発性」に着目し、そこから歴史の全体像を読み替えることで、新たな知見を提示している。

その着目が特徴的であるからこそ、資料との出会いや、読み解く際のスケールの問題に関する質問が寄せられた。捕鯨に関連する一次資料は比較的多くが公開されているからこそ史資料を入手することが難しくないが、その膨大な量を読み解くには相応の時間と努力が必要となる。赤嶺は、こうした史資料の研究に加えて、現代における調査も積極的に重ねている。

たとえば、万次郎の生誕の地である足摺岬へ向かったことや、共同船舶株式会社の捕鯨母船日新丸への乗船、太地町の追い込み漁の現場、さらに東南アジアのヤシ類農園まで。研究会の限られた報告時間にもかかわらず、数えきれないほどのフィールドでの物語が語られ、聞き手がまるでその場の風景を目の当たりにしたかのような臨場感と没入感を感じさせた。

こうした「追体験」を通じて培われた実践的な知識が、先行研究や資料を読み直すなか、研究者自身の直感的な懷疑——「どうもそうは思えない」と感じる瞬間——とつながるひらめきの瞬間があると赤嶺は語った。筆者は、その過程にこそ、赤嶺が実感している研究の〈面白さ〉が宿っているのではないかと感じた。

3. 方法にならない方法——他者の経験と物語

赤嶺の研究におけるもっとも大きな特徴は、他者の経験を自ら追体験し、そこから問いを生成・具体化していく実践的姿勢にある。赤嶺は、このような「追体験」を、チンの『マツタケ』から学び取ることができたと語った。

チンは、マルチスピーシーズ民族誌という方法を通じて、人間と非人間的存

在(樹木、菌類、岩石など)との関係性に注目し、不確定で不安定な現実社会のありようを描き出している。そのため『マツタケ』は、2004年から10年をかけてアメリカ合衆国、日本、フィンランド、中国で実施されたフィールドワークに基づいて執筆され、さらに、人類学者、生態学者、菌類学者、マツタケ関係者など、多様な専門家や関係者とともに現場を歩くことで、マルチサイテッド・エスノグラフィーの手法を実践したものとなる。

赤嶺は、その翻訳にあたって、作中で言及されているフィールドを自ら追体験することによって、チンの方法論を学んだと語る。その追体験とは、わたしの理解では、個々の生における記録や経験をたどり、その意味を再構成していく営みではないかと思う。

たとえば、教科書的な知識として一度は誰もが学んだことのあるジョン万次郎の生に対し、赤嶺は、あらためて自ら問いを立て直し、その足跡をたどることで、新たな発見と意味を導き出している。方法論を学び、追体験することは誰もが可能である。しかし、赤嶺の実践からは、体系化された知識を学ぶだけでは得られない着眼点や想像力、行動力が感じられた。

筆者も学部時代に赤嶺の著書『ナマコを歩く』⁴⁾と『鯨を生きる』に出会い、「現場に学ぶ」という方法に強く惹かれたことを今でも覚えている。その影響を受け、筆者自身もこれまで、有機農業に取り組む農業者たちのもとを訪ね、彼らの営みを追体験するかたちで調査をおこなってきた。

当初は、農業者が都内に野菜を販売、もしくは納品するタイミングで話をうかがっていたが、彼らの現場に向かうに全く異なる語りを得られた。たとえば、有機農業に取り組む理由をたずねたとき、販売先では都内での有機農産物の需要が大きな理由として挙げられていた。現場に向かうと、ある農業者は大好きな里山の風景を案内しながら「この山が好きで、見守りたいから」と答え、別の農業者は家庭で代々受け継いできた農法や幼児期の経験を聞かせてくれた。その言葉や行動には、それぞれの価値観や農業観がにじんでいた。

赤嶺の実践から学んだことは、こうした現場に身を置き、追体験することが、単なる調査手法やデータ収集の手段にとどまらず、自らの問い自体を揺さぶる経験であるということだ。筆者の場合には、農業という営みを経済合理性のみで読み取ろうとした姿勢に反省し、生活世界としての農業に着目する機会となった。

さらに、現場に学ぶとは、あくまでも出発点であり、そこからどのように社会や学問に応答していくのかが問われているのだと感じた。ひとりの参加者が「方法にならない方法」と表現したように、赤嶺の報告には体系化できない独自の方法論があり、そこからノンスケラブルな問題を解いていこうとしている。だからこそ、赤嶺の報告タイトルが疑問形の「言語化できるか?」となっている意図が理解できた。方法としてまとめきれない、言語化することのできない方法論を指しているのだろう。

注

- 1) Tsing, Anna, 2015, *The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*, Princeton: Princeton University Press. (= 赤嶺淳訳, 2019, 『マツタケ——不確定な時代を生きる術』みすず書房.)
- 2) 赤嶺淳, 2017, 『鯨を生きる——鯨人の個人史・鯨食の同時代史』吉川弘文館。
- 3) 鶴見良行, 1982, 『バナナと日本人——フィリピン農園と食卓のあいだ』岩波新書。
- 4) 赤嶺淳, 2010, 『ナマコを歩く——現場から考える生物多様性と文化多様性』新泉社。

数値と感覚のはざまで

——肌診断カウンセリングの現場から考えるノンスケーラビリティ

永山 理穂 一橋大学大学院 社会学研究科 博士課程

1. 研究背景と問題の所在

赤嶺報告では、アナ・ローエンハウプト・チンの著書『マツタケ——不確定な時代を生きる術』(2019年邦訳)における「ノンスケーラビリティ」概念と多機関の絡まり合いに着目し、資本主義的な標準化から溢れ出る即興的・周縁的な実践の意義が指摘された。赤嶺はまた、制度的な管理から零れ落ちる経験知の厚みを、鯨油・ナマコ・捕鯨などの事例に即して論じ、制度的スケールと現場実践の「ねじれ」を読み解く方法論の重要性を強調している。

こうした赤嶺報告を踏まえ、本稿ではアナ・チンのノンスケーラビリティ概念と、カナダの社会学者ドロシー・E・スミスの提唱する「everyday world (日常世界)」概念を分析の軸に据え、美容部員による肌診断カウンセリングの現場で観察される「客観的な数値と主観的な体感の不一致」への即興的な対応実践を考察する。具体的には、肌質水油計など機器による測定値(制度的テキスト)と顧客自身の肌感覚(語り)の間に生じる齟齬を、美容部員がその場限りの要因説明によって合理化・物語化するプロセスに注目する。そして、このような即興的調整行為をノンスケーラビリティの視点から、再現不可能・非標準化的な価値創出の一形態と位置づける。

本稿の構成は以下の通りである。まず第2節でスミスとチンの理論枠組を整理し、両者を接続する視座を示す。第3節では赤嶺報告および『マツタケ』の民族誌的記述に現れる制度的スケールと現場実践のねじれを示す具体例を概観する。続く第4節では筆者のフィールドノートに基づき、美容部員と顧客との肌診断カウンセリングの実践を描写する。第5節においてその実践をeveryday worldとノンスケーラビリティの観点から再評価し、制度と現場のねじれを読み解く方法論的意義を検討する。最後に第6節で考察とまとめを示す。

2. スミスとチンの理論枠組み——

everyday world とノンスケーラビリティ

ドロシー・E・スミスの提唱する「everyday world as problematic (日常世界をプロブレマティックに捉えること)」は、フェミニストの立場から日常生活世界に埋め込まれた社会関係を分析するための視座である。その基盤となるアプローチである「制度のエスノグラフィ (Institutional Ethnography)」は、従来の客観主義的

な社会学知に対する批判として生まれた。彼女は「客観化された知識」に疑問を呈し、人々の経験する日常世界と、それを組織化する制度的関係との連関を明らかにしようと試みた (Smith 1987: 155-156)。つまり、日常世界を丹念に調査することによって、制度や権力によって見えなくなっている社会的組織化の実態を可視化しようとしたのである。スミスによれば、調査は現実の具体的状況から開始し、その状況を形作っている制度的プロセスを下から掘り起こすべきだという。こうした視点は、トップダウンに一般理論を適用するのではなく、エビデンスに富む日常実践の厚みから社会構造を読み解く方法論を提供する。

他方、人類学者アナ・ローエンハウプト・チンは、著書『マツタケ』の中で「ノンスケーラビリティ (non-scalability)」という概念を提起している。これは、近代資本主義が前提とする一様なスケール拡大に乗らない現象に光を当てる概念であり、すなわち、あらゆる規格化を拒絶する性質を指す (Tsing 2015=2019: 57-66)。チンの議論によると、資本主義的な「進歩」は常に規格化と拡大再生産によって特徴づけられるが、その陰には規格化できないもの、すなわちノンスケーラブルなものが遍在し、しばしば見過ごされてきたという。チンはまた、人間と非人間を含む多種間の絡まり合いの中で生まれる予測不能で即興的な協働関係に注目し、それらが生み出す価値や生存戦略を描き出した。例えば、菌類であるマツタケと森林生態系、人間の拾い手たちとの相互関係は、単線的な工業的生産モデルには収まりきらない多様性と不安定性に満ちている。チンはこのような不確定な状況下でこそ生まれる価値に注目し、従来のスケール志向の開発論に再考を迫っている。

スミスとチンの理論はアプローチこそ異なるものの、接続可能な視座を提供しうる。スミスは日常世界に着目することで、大きな制度的枠組みから零れ落ちる人々の経験や知識をすくい上げる方法論を示した。一方チンは、資本主義的規格化に収まらない周縁的实践に価値を見出し、それを理論化した。両者とも、巨視的制度あるいはグローバル資本主義の論理だけでは捉えきれない「現場のズレ」に着目し、それを理解する枠組みを提示していると言える。すなわち、制度化された客観知からは見えにくい現場固有の知見や実践を掘り起こし、それらの社会的意義を積極的に評価する点で共通している。本稿ではこの接続可能性に基づき、スミスの everyday world という視点とチンのノンスケーラビリティという視点を統合的に用いて、あるサービス労働の具体的場面を分析していく。

3. 民族誌的事例——

鯨油・ナマコ・マツタケに見る制度と現場のねじれ

赤嶺報告および関連する民族誌的研究からは、制度的スケールと現場実践のねじれを示す具体的事例がいくつか示唆されている。たとえば19世紀の捕鯨産業において、アメリカの資本家たちは世界中の鯨から得られる鯨油をグローバルな市場に供給したが、その採取現場である捕鯨船の活動は、当時の典型的

な工場制生産とは似ても似つかない即興的で無規律なものだった。荒くれた船乗りたちによる鯨の追跡・解体という現場の様子は、規格化された工場労働のステレオタイプと鋭く対照をなしている。それでも彼らの得た鯨油は最終的に米国資本主義のサプライチェーンに組み込まれ、グローバルな商品となったのである。この事例は、制度化された生産モデル(工場制・大量生産)と現場の実践との間に大きなねじれがあること、そして資本主義がそうした現場由来の産物を「サルベージ(回収)」する形で価値化してきたことを示している(Tsing 2015=2019: 94-96)。実際、チンによれば、捕鯨を支えた先住民の知識・技術や、プランテーション農園に不可欠な太陽光といった「資本家が自ら生産・制御できないもの」を巧みに利用することこそがサルベージの本質である。資本主義はこうした非制度的な要素を自らの体系に翻訳・取り込みつつ発展してきたが、その翻訳過程にはしばしば暴力性や矛盾が孕まれると指摘される。すなわち、一見世界が均質に「開発」されていくようでいて、実際には多様で非標準な要素を背景に成立しているということである。

赤嶺自身の研究もまた、ローカルな文脈とグローバルな文脈の絡まり合いに注目しつつ、水産資源利用の歴史を描き出してきた。たとえば彼の著作『ナマコを歩く』(2010)では、東南アジアから中国圏に輸出された乾燥ナマコ交易をフィールドワークし、沿岸の漁民たちの知恵や分類体系と、国際市場の規格との齟齬を明らかにしている。そこでは、現場の漁民たちが長年培ったナマコの目利き技術や加工法と、輸出先で求められる品質基準との間にずれが生じ、そのずれを埋めるべく仲買人らが創意工夫する様子が描かれている。こうした例も、制度化された基準からこぼれ落ちるローカルな経験知が取引を成り立たせる上で不可欠であることを示していると言えよう。さらに赤嶺の『鯨を生きる』(2017)では、日本の捕鯨文化における捕鯨者たちの語りから、国際的規制や産業構造の変化に対する現場の適応と抵抗の歴史が綴られている。ここでも、グローバルな制度(商業捕鯨モラトリアムなど)とローカルな慣習との齟齬の中で、人々が模索した即興的な対応策が浮かび上がっている。

一方、『マツタケ』においてチンが提示した民族誌は、資本主義の周縁で展開するノンスケーラブルな経済活動の詳細な記述である。彼女はアメリカ・オレゴン州のマツタケ採取から日本への流通に至るグローバル・サプライチェーンを追跡し、栽培不可能な野生キノコゆえに生じる独特の取引ネットワークを描いた。マツタケ山では、ベトナムやラオスからの移民労働者をはじめ、多様な人々が秋になると森に集い、競い合いながらも協働してキノコを探す。そこには工場や農園のような画一的管理はなく、天候や生態系、労働者同士の関係性など、不確定要素に富む現場実践が展開する。それでも採れたキノコは選別・格付けを経て市場価値を与えられ、国際的な商流に組み込まれていく。チンはこのプロセスを通じて、「予測不能なものだらけの世界でこそ生まれる協調関係」や「スケール化できないからこそ可能な価値創出」の実例を示したのである。彼女の叙述から浮かび上がるのは、グローバル経済の隅々に存在する即興性と多様性が実は不可欠な役割を果たしているという点であり、それ

を正面から捉える理論装置としてノンスケラビリティ概念が有効だという主張である。このように、赤嶺およびチンの民族誌的事例はいずれも、制度化・標準化の網目から漏れ出た周縁的实践の意義を示し、制度と現場のねじれに着目することの重要性を示唆している。

4. 美容部員の肌診断カウンセリング——フィールドノートから

第4節では、デパートの化粧品売場における美容部員と顧客の肌診断カウンセリング場面について、筆者が参与観察で記録したフィールドノートをもとに描写する。美容部員は専用の肌質水分・油分測定器を用いて顧客の肌コンディションを数値化し、その結果に基づいてスキンケア商品の提案やアドバイスを行う。しかし実際のカウンセリングでは、機器が示す数値と顧客本人の肌感覚が一致しない場面がしばしば見受けられた。以下はその一例である。

顧客「昨日しっかり保湿パックもしたし、今日は前回より肌の調子がいい感じがするんです。」

美容部員「では、水分と油分を測ってみましょうね……。 (測定器を当てて) 水分量は30%、油分量は30%ですね (※理想値は水分量60%以上、油分は40~50%)。数値で見ると水分がやや不足しているようです。」

顧客「えっ、そんなに乾燥してるんですか？ 自分では潤っているつもりだったんですが……」

美容部員「表面は潤っていても、内側が乾いているインナードライ状態かもしれませんね。昨晚パックをされたとのことですが、例えばアルコール成分のある化粧水をお使いでしたら、一時的に潤った感じがしても肌の内部は意外と水分が足りていないことがあります。それに、今日は朝から冷暖房で空気が乾燥していますので、その影響でお肌が水分を逃がしやすくなっているのかもしれません。」

顧客「そうなんですね……。」

美容部員「ただ、ご安心ください。大きなトラブルではありませんので、例えば保湿力の高い美容液に替えてみるとか、ケアの工夫で改善できますよ。肌状態は季節や体調でも日々変わりますから、今日の結果も『こういう日もある』くらいに考えていただければ大丈夫です。」

このやりとりから、機器計測の客観数値と顧客の主観的体感との齟齬に対し、美容部員が即興的な説明を加えている様子が読み取れる。美容部員は「インナードライかもしれない」「空調の影響かもしれない」といった要因を提示し、「なぜ数値と感覚が食い違うのか」を物語的に納得づけている。その説明によって、顧客は自らの感覚と機械の示す客観データとの両方を受け入れやすくなり、カウンセリングは円滑に進行する。ここで美容部員が動員した知識は、マニユ

アルに明記されたものではなく、日々多数の顧客対応を重ねる中で蓄積した経験知や勘に基づくものである。実際、別の場面では「昨晚お酒を飲まれましたか？ アルコールで一時的に肌がほてると油分が多く出るんです」といった説明や、「生理前でホルモンバランスが変わる時期なので不調が出ているのかもしれない」といった説明がなされているのも観察された。それぞれ内容は異なるものの、いずれもその瞬間の状況に合わせた一回きりの理由づけであり、数値と感覚の食い違いを埋め合わせる役割を果たしている。

5. everyday world とノンスケーラビリティからみる 美容部員の実践

第4節の事例に見られるような、美容部員による即興的な調整実践を、スミスの everyday world とチンのノンスケーラビリティの視点から再検討してみたい。まずスミスの視点からは、肌診断カウンセリングで起きた「数値と体感の不一致」というねじれこそ、日常世界を起点に制度的枠組みを問い直すための入口となる。測定器が示す数値データは、化粧品メーカーや美容業界が共有する標準化されたテキスト（客観化された知識）であり、一種の制度的言説と言える。他方で顧客の「潤っているつもりだった」「調子が良いと感じる」といった主観的訴えは、当人の身体経験に根ざしたローカルな知である。両者の齟齬は、まさに制度的テキストと個別の経験世界との接点で生じるズレであり、スミスのいう「日常世界の問題圏」に他ならない。制度側の論理ではこのズレはノイズや誤差として片付けられがちだが、スミスはそこにこそ着目すべきだとする。美容部員はまさにこのズレを無視せず、顧客の経験世界に即した形で解釈を与えている点で、日常世界に潜む社会的組織化を可視化する実践を行っているといえよう。つまり、美容部員はその瞬間の対話を通じて、数値（客観知）と肌感覚（主観知）を架橋するローカルな物語を紡ぎ出し、制度的テキストが現場でどのように意味づけられるかを具体的に示しているのである。これはスミスの言う「客観化された知識」への現場からの応答とも解釈でき、日常世界の側から制度的現実を再構成する行為といえよう。美容部員の調整実践は、一見取るに足らない現場対応のようでいて、日常経験の厚みを通して制度的知識の運用を組み替える知的作業でもある。

次にチンのノンスケーラビリティの視点からこの現場を見直すと、別の意義が浮かび上がる。肌診断カウンセリングにおける即興的な要因説明は、マニュアル化・再現化が難しいその場限りの振る舞いであり、まさにノンスケーラブルな要素である。美容部員は各顧客、各状況に応じて、その都度説明を創り出している。それは、全店舗・全顧客に画一的に適用できる汎用解答ではなく、個々の文脈に最適化された即興解答である点で再現性がない。資本主義的なサービス産業は一般に、接客マニュアルや統一研修によってサービスの標準化・スケール化を図ろうとする。しかし現実には、この事例が示すように標準化された数値指標だけでは対応しきれない局面が生じる。その穴を埋めてい

るのが現場の労働者による非公式な知恵やアドリブ対応であり、そこには企業が完全には制御できない要素が介在している。チンの議論になぞらえれば、測定器による数値評価というスケラブルな装置の背後で、各美容部員が発揮する個人の経験知や対人スキルは、企業にとっての「サルベージされる要素」に近い。企業側(制度側)はそれら非公式知に完全にはアクセスできないが、現場任せにしつつ巧みに利用してサービスの質を保っているとも言える。ノンスケラビリティ概念は本来、グローバル資本主義の中で規格化に抗う周縁現象を捉えるためのものであったが、同様の視点で身近なサービス労働を見れば、標準化の陰にこのような非標準の価値創出が横たわっていることが理解できる。美容部員がその場で紡ぐ物語は、言わば小規模で再現不能な一点物の価値であり、それ自体は交換可能な商品にはならない。しかしその場に居合わせた顧客にとっては意味を持つ価値(安心感や納得感、信頼関係)を生み出している。これは資本主義的標準化プロセスから零れ出る形で生まれる価値創出であり、チンの言うノンスケラブルな実践の一例と見ることができる。

以上のように、美容部員による即興的な調整実践は、everyday world とノンスケラビリティという二つの観点からそれぞれ含意を持つことが分かる。すなわち、日常世界の厚みから制度的テキストの意味を組み替える現場知の行使であると同時に、標準化不能な形で価値を付与する周縁的实践でもある。この「制度と現場のねじれ」への対処そのものが持つ積極的な意義を捉え直すことで、我々は現代のサービス労働に新たな光を当てることができるだろう。

6. 客観データと主観感覚をつなぐ知識生産

以上で示したような肌診断カウンセリングの現場に見られる即興的調整行為は、制度化された客観知と個別具体的な主観知との狭間で行われる知識生産として捉えることができるだろう。ここで美容部員は単なる商品販売員ではなく、科学的データ(肌測定値)と生活者の感覚(肌実感)をつなぐ通訳者・調整者として機能している。客観的な数値を鵜呑みにして顧客の主観を否定するのではなく、逆に主観だけを尊重して測定結果を無視するのではなく、両者が整合するような物語を場内で創出するその姿は、一種の知識生産として評価されうる。ここでは知識が一方方向に伝達されているのではなく、現場で対話的に共創されている点が重要である。測定器という制度的テキストが提示する「客観的事実」ですら、現場のやりとりの中で再文脈化され、顧客それぞれの生活世界に適合する形に調整されて初めて意味を持つ。言い換えれば、美容部員と顧客の関わり合いを通じて、肌という身体をめぐる知識がその場ごとに再編成されているのである。このプロセスは、スミスの指摘したように従来の抽象的な知識体系が見落としてきた日常世界の知を浮かび上がらせるものであり、またチンの強調した不確定な状況下での即興的な価値創出が、日常の労働空間でも確かに起きていることを示す。

以上、本稿では美容部員による肌診断カウンセリングの実践を事例に、客観

数値と主観的体感の不一致に対する即興的調整行為を分析した。スミスの everyday world の視点からそれは制度的テキストの現場における再解釈プロセスとして位置づけられ、チンのノンスケーラビリティの視点からそれは非標準的な価値創出の実践として評価できることを示した。これらの考察を通じて、資本主義的標準化の網の目から零れ落ちる周縁的实践にこそ着目する意義、および日常生活世界を出発点として制度のあり方を問い直す方法論的可能性を確認した。

参考文献

- 赤嶺淳, 2010, 『ナマコを歩く——現場から考える生物多様性と文化多様性』, 新泉社.
- 赤嶺淳, 2017, 『鯨を生きる——鯨人の個人史・鯨食の同時代史』, 吉川弘文館.
- Smith, Dorothy E., 1987, *The Everyday World as Problematic: A Feminist Sociology*, University of Toronto Press.
- Tsing, Anna Lowenhaupt, 2015, *The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*, Princeton University Press. (赤嶺淳訳, 2019, 『マツタケ——不確定な時代を生きる術』みすず書房.)

クマ肉を売ること、 あるいは逃れつづけるマイタケ

——出会いに開かれた研究のあり方と、スケールについて

松浦 海翔 一橋大学大学院 社会学研究科 博士課程

1. 気迫のこもった研究を目指して

赤嶺の報告は、「研究の『面白さ』は言語化できるか？」という問いからはじまった。そのことについては難しいとしつつも、気迫のこもった作品だけが読者の心を掴むことができるとして、そこに「面白さ」を共有する可能性を見出そうとしているように感じられた。

報告は、まさしく赤嶺の研究に対する気迫がひしひしと伝わってくるものであったように思う。以下では、まず赤嶺の報告をまとめたあとで、赤嶺の報告と、自分自身がおこなっている阿仁マタギと呼ばれる狩猟者についての調査研究、それからアナ・チンの著作である『マツタケ——不確定な時代を生きる術』という三者のあいだで、わたしの調査研究から見出しうる資本主義的な要素と、研究のスケールについて考えたい。

2. 混ざりあう2つのスケール

——プランテーションから近代科学まで

以下で議論することにも関わるため、まずは赤嶺の報告をまとめるにあたっての視点について触れておきたい。わたしが理解したかぎり、今回の報告において一貫していたキーワードとして、「スケール」あるいは「スケーラビリティ／ノンスケーラビリティ」が挙げられる。それが意味するところは多重／多義的であり、第一に研究それ自体のスケール、第二に資本主義、あるいは産業に関係する意味でのスケールである。またこの意味で用いられる「スケール」は、本稿の視点にもかかわるものである。そのため、まずは『マツタケ』を引きながら、「スケール」、ないし「スケーラビリティ／ノンスケーラビリティ」について述べておきたい。

チン(2015=2019: 58-59)は、「ほとんどの近代科学では、研究の枠組みを変えることなく、無限大に拡張していくことが要求される」という点を指摘し、「研究枠組みをより大規模なスケールに適用させる能力は、近代知であることの証になっている」という。さらには、スケーラビリティ[規格不変性]を「プロジェクトの枠組みをまったく変化させずに、円滑にスケールを変えることができる能力」と説明し、その点にビジネスと研究の同質性を見出している。すなわち、スケーラブル[規格不変]なビジネスは、スケールの拡大に際して、

組織体制を変化させる必要がないのと同じように、スケーラブルな研究は、既存の研究枠組みに合致する、あるいは適合するようなデータだけを受容するというのである。その意味において「スケーラビリティは、プロジェクト内要素間の出会いに内在している不確定性を無視することを要求する」。

『マツタケ』に触発された赤嶺がいうには、本研究会を組織した根底には「あらたな社会科学のありかたが求められているいま、それに資するような、異なる分野・世代の人たちとの共同研究を組織できないか？」という問題意識がある。というのも『マツタケ』は、世界各地でのマルチサイテッドな、かつ共同でおこなわれた研究の成果として提出されたものだからである。

赤嶺がこれまでもおこなってきた、ナマコ研究においても、捕鯨研究でも、あるいは現在進行中の鯨油(油脂)の研究においても、各地を歩き回ることに、史資料を横断すること、そしてそうした場での人びとや研究者との出会いが、重要な位置を占めているように見受けられた。とりわけ、今回の報告のなかで印象に残っていることとして、以下の2点が挙げられる。第一に、土佐清水ジオパークでの経験についてであり、これは研究の方法論的な側面にかかわるものである。第二に、産業としての捕鯨業と、油脂の確保にむけたプランテーション経済の創発についてである。

はじめに、第一の点についてである。捕鯨にかかわってきた土地の景観を見たときに、それがこれまでの経験や知識と結びつき、地理的条件の近接性にきづいたというものであった。またそのこととも関連して、質疑応答のなかで「資料をどのように見つけているのか？」という質問に対し、赤嶺が「まさに偶発性によるものであり、現代の研究もしている関係から、経験と資料が合わさる瞬間がある」と回答していたことも印象に残っている。資料や土地、あるいは人との偶発的な出会いが、研究を大きく変容させる可能性に開かれているということなのであろう。

第二の点について、報告のなかで説かれていたのは、産業としての捕鯨業において、いかにして鯨油が砂糖などと同じく世界商品になったのか、そして1960年代に鯨油市場が崩壊したあとで、油脂の生産現場はどのようになっているのか、ということであった。後者について、赤嶺によれば、1960年代以降は植物性油脂の利用が動物性油脂のそれを大きく上回っており、それは「プランテーション型経済」とでも呼べるものが確立されたことを意味しているという。また、それに関連して興味深かったのは、ハワイ諸島における「偶発的資源開発」の過程についてである。ハワイ諸島において、搾取型経済からプランテーション型経済への移行は、ラッコやオットセイの毛皮、白檀、銃火器、捕鯨、サトウキビやパイナップルといったプランテーションなど、さまざまな要素によって生じたものであるという。

ふたたびアナ・チンのことばを引用したい。チン(2015=2019: 59-61)は、プランテーションをスケーラビリティの代表事例として検討している。16世紀、17世紀のブラジルのサトウキビ・プランテーションが成功したのは、ポルトガル人たちが地元の人びとと植物を排除(疎外)し、空っぽとなった土地に外部

から労働者と作物を持ち込んだためであった。また、そこに投入された労働者も、あるいはキビも「自己完結的で、出会いとは縁遠い」ものでなくてはならなかった。その結果「労働と商品作物の両方について、プロジェクトの枠組みの範囲内で互換性が創発した」、すなわち枠組みを変えずにスケールを拡大しつづけることができたわけである。

3. 資本主義的要素と研究のスケール

——クマ肉とマイタケの事例から

最近になって、わたしの調査地の集落に、ジビエの解体処理施設が新設された。それにより、これまでは原則として自家消費しか認められていなかった野生鳥獣の肉を販売することが可能になった。

わたしの調査地に住んでいる狩猟者たちは、おもにツキノワグマ(以下、クマ)を狩猟している。そして、狩猟により捕獲されたクマは、山の神からの「授かりもの」といわれている。従来、山の神から「授かった」クマは、「マタギ勘定」と呼ばれる方法で分配されてきた。そこでは、参加者全員に対して質的・量的な平等を担保しながらクマ肉が分配される。また基本的にクマ肉は、ダイコンや豆腐、ネギなどと一緒に煮込み鍋にして食されてきた。そのため分配をするにあたっては、大きい肉も、切れ端の肉も、あるいは部位も関係なくごちゃまぜにされ、袋に入れられていた。

しかしながら、クマ肉を販売するとなると、部位というものが重要になる。こうした状況のなかで、解体の方法も変わることになる。これまでは、ある程度部位が均等に行き渡り、最終的な重さがほとんど同じになればよいとされていたため、肉の切り取り方は重視されていなかった。だが、販売するにあたってはそうではない。とりわけ背ロースは高価なため、できるだけひとまとまりとしてとるほうがいいのである。そして、切りとられた肉は東京にあるフレンチのレストランや、創作和食料理を提供する飲食店に送られる。

山の神からの「授かりもの」が、解体処理施設のなかで翻訳され、東京のレストランに送られる。クマと人間、そして山の神の絡まりあいのなかに、あらたに市場が入り込んできたのである。

他方で、こうした翻訳を逃れつづけているものがある。それは奇しくも、『マツタケ』で描かれていたもの、すなわちキノコである。わたしの調査地では、クマなどと同様に、山菜やキノコもまた、山の神からの「授かりもの」とであると考えられている。

キノコを手に入れることができるかは、やはり「偶発性」によっている。ある秋、わたしは集落の人と連れ立って山に入っていった。「この先に、いいナメコスポットがあるんだよ」と、かれは軽トラックを運転しながらいった。林道をしばらく走っていると、土砂崩れの影響で、目の前の道路がごっそりとなくなっていることがわかり、それ以上進めないことが明らかになった。かれは「ああ、俺のナメコスポットが……」と悲しみを露わにしていた。

そのあと、別の山に入ってみることになった。かれはサモダシ(ナラタケ)が生える木も知っていた。しかしながら、タイミングが遅すぎた。ほとんどのサモダシは、すでに採取できる時期を終え、黒くなっていた。それもあって、もう一度別の山に行こうという話になった。しばらく山のなかを歩くと、沢沿いに土砂崩れが起きた跡に出くわす。木々は倒され、地形は変形し、空が見えるようになっていた。同行していたかれいわく、倒れていた木は、キノコが生えそうな予感を感じさせる見た目をしているという。うまくいけば、かれは翌年ここでキノコをとるだろう。土砂崩れで行けない場所があり、そのためほかの山に行く。そして、別の場所では、土砂崩れからキノコが生える可能性を感じる。おなじ「土砂崩れ」を機に、キノコとの別の関係性が浮かび上がるのである。

ほとんどのキノコは、自家消費用として採取される。ただし、集落の人のなかには、それを販売している人もいる。自家消費されることも、販売されることもあるキノコのなかで、とくに異彩を放っているのは、マイタケである。

1983年7月、「株式会社雪国まいたけ」(現ユキグニファクトリー株式会社)が五十沢工場(新潟県南魚沼市)を新設し、マイタケの生産販売を全国的に開始した。マイタケは、色もかたちも大きさも、ほとんど規格化され、ビニールのパッケージに詰められて販売される。わたしたちは、いまやスーパーマーケットでそれらを手軽に購入することができるようになった。

しかしながら、わたしの調査地におけるマイタケと人びとの関係性は、まったく異なる様相をみせる。それはつねに隠されるのである。

キノコの採取に情熱を注ぐ人であれば皆、何箇所かはマイタケが生える場所を知っている。そしてその場所を人に教えることはない。極端な場合には、家族にさえ秘密にしておくこともあるという。ただし、その場所に毎年マイタケが生えるとはかぎらない。場合によっては、7年に1回しか生えてこないものもあると聞いたことがある。そのためかれらは、毎年時期になるとマイタケを見に、山に行く。そしてもし小さいものが生えていることが確認されれば、ほかの人に見つからないように、息を止めながら小さい枝や落ち葉をかけておくという。息を止めるのは、呼気によりマイタケが黒く変色するのを防ぐため、だそう。そして何度も通ったすえに、大きくなったマイタケを採取することができるのである。ただし、それはときに失敗する。隠しているとはいえ、ほかの採取者に見つかってしまえばそれまでであるからだ。見つけたマイタケが大きくなるのをどこまで待つか、という駆け引きが、そこには存在している。

クマ肉をはじめ、野菜や山菜、ほとんどのキノコ、あるいは労働力にいたるまで、それらは惜しみなく分け与えられるのに対して、なぜマイタケは隠されるのだろうか？ 主婦たちが連れ立って車で走っていた定期市での買い物、スーパーマーケットでのそれに代替されたこと、そして雪国まいたけがマイタケの人工栽培に成功し、スーパーマーケットで販売されはじめたことを、人びとはどのように経験していたのだろうか？ このことについては、これから掘り下げて研究できればと考えている。

わたしがはじめていまの調査地での調査をおこなったとき、当初の関心は先述した「マタギ勘定」の実践にあった。資料や文献と向き合うときも、「マタギ勘定」のことが書かれているところを探し、抜き出すように読んでいた。参与観察やインタビューなどといった調査もまた同様で、「マタギ勘定」のことを見聞きすることに注力し、それ以外の生活が見えていなかったように思う。そこで目指していたのは、理論的な枠組みのなかで捉えられるデータをとることだったのである。

このことに気がつけたのは、大学院に入り、調査や研究が「出会い」に開かれたものであり、まさしく「偶発性」が重要であることを学んだからである。わたしはたくさんの狩猟者や集落の人びと、あるいは研究者と出会い、会話をすることで研究をしてきた、と思っている。また、クマやカモ、山菜、キノコとの出会いが、あらたな研究をおこなうきっかけになったともいえるかもしれない。ただし、いろいろなテーマが混在する、わたしのこうした研究は、ともすればひとつにまとまらないのではないか、という不安に苛まれることもある。しかしながら、もしかするとそれこそが、わたしが近代的な知のあり方に規定されていることの証左なのかもしれない。今後は、研究の枠組み、あるいはスケールをどのように壊し、構築していくかについても向き合っていきたい。

文献

Tsing, Anna Lowenhaupt, 2015, *The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*, Princeton University Press. (赤嶺淳訳, 2019, 『マツタケ——不確定な時代を生きる術』みすず書房.)

フィールドで出会う「わからない」と向きあう

鈴木 佳苗 一橋大学大学院 社会学研究科 博士課程

1. 〈偶発性〉を呼ぶ場としてのフィールド

「研究の「面白さ」は言語化できるか？」において、報告者の赤嶺淳は、研究の礎を方法論と問題意識においている。いずれも、一朝一夕で発見したり、身につけたりすることはできないものである。マツタケにかかわる複数のフィールドを横断的に調査したアナ・チンは「研究分野は研究の進展とともに発生してくるのであって、研究に着手する以前から存在しているわけではない」(Tsing 2015=2019: 8)と述べるように、研究分野ははじめから存在しているものではない。したがって、研究を進めるなかでは常に批判的な視点で学術分野自体を捉え、疑いを持つべきであろう。またそうだとすれば、研究分野と切っても切り離せない関係にある方法論にかんしても、自身の問題意識から構想される研究に適した方法を、模索し続けなければならない。

赤嶺は、自身が影響を受けたとする2人の研究者——鶴見良行とチン——の軌跡を追体験することで、独自の方法論を構築しつつある。鶴見やチンに共通する、モノ研究における複数の地域をまたぐマルチ・サイテッドなアプローチに魅せられ、自身の境地を開拓したようである。このようにして生み出された赤嶺の研究方法は、先行研究をまたぎながら、フィールドに足を運ぶこと、が核である。

『マツタケ』の翻訳を進めるなかで、赤嶺は自著『鯨を生きる』脱稿時には検討できていなかった、かつての資本主義を象徴する世界商品であった「鯨油」に着目する必要性に気づいた、という。鯨油に注目すれば、1960年代以降、動物性油脂に取って代わったパーム油や大豆油に代表される植物性油脂にも視野がひろがり、現在は、油脂間の相対的な関係性を捉えようとしている。そしてそこから生まれた仮説は、「近代とは、資本蓄積を目的として搾取型経済からプランテーション型経済に移行することではないか」というものだ。調査研究の蓄積が、次なる研究課題や問いにつながっていることは、筆者自身の修士論文の反省点についても、次に活かすことができる材料であると、研究に対する姿勢を前向きに捉えなおす支えとなった。

2. 自身の調査に引きつけて①——新たな問いへの手がかり

筆者は、修士論文「境界をつなぐ食——現代マニラ首都圏に暮らす回帰ムス

リムの語りから」の執筆にあたり、フィリピンのマニラ首都圏で、2023年8月28日～9月3日、2024年3月25日～4月12日、2024年9月18日～23日の計32日、参与観察とインタビュー調査を中心としたフィールドワークをおこなった。『マツタケ』では、著者のチンがフィールドにおける調査を通じて、しばしば戸惑いや驚きをともなったことが赤裸々に描かれている。そのなかで本稿ではとりわけ、以下の記述を取り上げたい。

オープンチケット村のすべてに、わたしは驚愕させられた。とくにオレゴン山中における東南アジア的な生活の雰囲気には、びっくりさせられるばかりであった。……アメリカの不安定である様——瓦解に生きること——は、こうした構造化されていない複数性の、溶解しえない混乱のなかに存在している。もはや人種のるつぼではなく、わたしたちは誰だかよくわからない他者とともに生活しているのだ。(Tsing 2015=2019: 150)

筆者もフィリピンの調査において、その社会に生活する人びとの出自や民族にかんする想定が覆る、という点において類似の経験をもつ。筆者は学部在学中、マニラにあるデ・ラ・サール大学へ交換留学をし、そこでフィリピンのイスラーム教について学んでいたため、マニラという都市がどのような場所で、どのような人びとが住む場所であるか、またフィリピンのイスラーム教の歴史や民族集団についても、ある程度知っているつもりであった。

フィリピンはキリスト教徒が国民の9割を占める国家であり、イスラーム教徒は人口の約6パーセント程度とマイノリティである。フィリピンにおけるイスラーム教は、14世紀頃にフィリピン南部のスル諸島に伝来されてからというもの、ミンダナオ島など南部を中心に繁栄した。そのためフィリピン人イスラーム教徒は、ミンダナオ島を中心とする南部地域にルーツをもつ、13の言語民族集団(すなわち、「生まれながらのイスラーム教徒」)が多数を占める。さらに、近年ではキリスト教徒からイスラーム教徒へと回帰(改宗)した人びと——現地語で「バリック・イスラーム(balik Islam)」と呼ばれる人びと——が増加しており、フィリピン人イスラーム教徒は大きく二つのカテゴリーに分類されてきた。

しかしながら、修士1年次にマニラ首都圏のムスリム・コミュニティ(イスラーム教徒が集住する地域)に足を運んでみると、そのような二分法では把握できない多様性と複雑性に直面することとなった。たとえば、父が13の言語民族集団に数えられるタウスグ人、母がバリック・イスラームという両親をもち、ミンダナオ島には居住したことがないイスラーム教徒との出会いである。

筆者は彼のことをどのように呼称すべきか、単純に既存の枠組みには分類できない難しさをおぼえた。また修士論文では、フィリピン人イスラーム教徒がどのような食事をハラールと判断するか、という研究課題を設けていたが、「フィリピン人イスラーム教徒」と一括りにして議論すれば、それぞれの言語民族集団やバリック・イスラームの多様性すらも見過ごされてしまうと、思い悩んだ。

このような経験は、筆者自身の認識の枠組みや、研究における記述の方法に問いを突きつけるものであった。同時に、このような驚きや悩みは、既存の研究における民族分類の再検討を迫ることでもあり、フィールドで直面した悩みに向きあうことは、先行研究の欠落点や問題点を発見する「手がかり」ともなりうる。チンが「東南アジアから米国にやってきた難民についての研究のほとんどは、東南アジアで民族が形成された過程を無視している」(Tsing 2015=2019: 48)と指摘するのは、まさに先行研究とフィールドとの往還によって得られた「手がかり」によって発見した、新たな問いではないだろうか。

3. 自身の調査に引きつけて②——終わりのない「研究の旅」

自著『鯨に生きる』の脱稿後、ノルウェーでの調査を経て、日本の捕鯨を相対化でき、また当時気付いていなかった鯨油という世界商品の観点を分析できなかったことが反省点であると赤嶺は回顧した。チンも、自身のフィールドワーク調査について、「わたし自身のマツタケをめぐる歩みは、まだ終わりそうもない。いずれはモロッコや韓国、ブータンにも足をのばさねばならない」(Tsing 2015=2019: 7)と述べており、特定の地域での経験が、他地域との比較や相対化を通じて、再解釈される過程の重要性を強調している。こうした複数のフィールドを往還するなかで、〈偶発性〉が訪れる土壌が整えられていくのかもしれない。

筆者は修士論文を執筆するなかで、マルチ・サイテッドな調査の必要性を抱えていた(いる)。修士論文を提出したいま、指導教員や審査教員からの講評を受けて痛感しているのは、フィールドの射程が不十分であったことである。フィリピンにおけるイスラーム教の歴史をたどれば、前述のように14世紀以降、南部のスル諸島やミンダナオ島を中心として定着し、発展してきた。1970年代以降、南部地域で続くイスラーム分離独立運動の戦火から逃れるため、あるいは南部の経済的困窮から、より安定した職業を求めたイスラーム教徒がマニラ首都圏へ移住を始め、現在マニラ首都圏に居住するイスラーム教徒は約20万人とも推定されるが、フィリピン国内におけるイスラーム教の宗教的・政治的・文化的な中心は、依然として南部に位置づけられていると言えるだろう。

しかしながら、修士論文の研究では南部地域への渡航がかなわず、マニラ首都圏でのフィールドワーク調査と資料調査に限定せざるを得なかった。これは、修士課程の2年という時間的制約だけでなく、南部地域の治安が安定していないなかで、現地に頼ることのできるネットワークをもてなかったことが大きい。フィリピンのイスラーム社会をつかむためには、やはり南部地域における調査が不可欠だと考えている。

筆者が食のハラールにかんするインタビュー調査をおこなうなかで、マニラ首都圏で出会ったイスラーム教徒たちは「ダバオ(ミンダナオ島の都市)のほうが、ハラールを含めた宗教実践に厳格であった」、「マニラでの生活は(イスラーム教徒にとって)ダバオよりも難しい。マニラにはまだまだイスラーム教徒が少ないから、食事はとても大変」と、日常生活における食のハラールについて、しば

しば南部地域と比較する語りがあった。また、フィリピンは国家主導のハラール認証制度が実現せず、現在フィリピン国内には複数の NGO や民間団体によるハラール認証機関が存在するが、そのうちの多くがミンダナオ島に拠点をおいている。彼らの語りを本当の意味で理解するには、またフィリピンのイスラーム社会のなかで食のハラールを捉えるには、マルチ・サイテッドなアプローチを取り入れなければならない。

しかし一方で、現実的な問題も残っている。研究はどこかでひとまずのピリオドを打ち、その時点で得られたデータをもとに、論文としてアウトプットしていかなければならない側面がある。終わりのない研究の旅のなかで、いかに区切りをつけながら歩んでいけばよいのか。これも共通の答えはないだろうが、常に思案しながら進んでいかなければならない。

4. おわりに

『マツタケ』には、ほかにも感銘を受けた点が複数あるが、特にローカルなフィールドの点と点を紡いでゆくことで、グローバルな観点をも描き出していることは特筆しておきたい。筆者は修士論文を執筆するなかで、その土地固有の歴史的、あるいは文化的な文脈によって形成されている事象を、グローバルな概念や理論に接続することの危うさと、難しさを強く感じていた。チンはそれぞれのフィールドでの経験を丁寧に描写することで、グローバルな議論に展開していた。これは筆者の今後の研究において、大きなヒントとなった。

最後に、チンは学問のあり方についても、マツタケから得られる示唆が適用可能であると指摘する。学問を私有化する傾向にあることを危惧する彼女は、「まだ知られていない学問の潜在性をくすぐるためには—— 予期せぬマツタケのシロのように、知の森を協働で維持していかなければならない」(Tsing 2015=2019: 425) と述べる。すなわち、共同研究という「遊び仲間」との協働から生まれる着想や偶発性の重要性を説いている。『マツタケ』第14章のタイトルである「セレンディピティ」は、失敗や崩壊のなかに、人の予期を超えるノンスケラブルな存在であるマツタケや、その周囲の森林・動植物をあらわしているが、それは同時に、チン自身の調査方法をも映し出す言葉のように思われた。筆者が次にフィールドを訪れるさいには、調査者としてそのような偶発性に会うために、いまできることを積み重ねていきたい。

参考文献

- Tsing, Anna Lowenhaupt, 2015, *The Mushroom at the End of the World : On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*, Princeton: Princeton University Press. (赤嶺淳訳, 2019, 『マツタケ—— 不確定な時代を生きる術』みすず書房.)
- 鈴木佳苗, 2025, 「境界をつなぐ食—— 現代マニラ首都圏に暮らす回帰ムスリムの語りから」 修士論文, 一橋大学大学院社会学研究科.

『マツタケ』と人種概念の ノンスケーラビリティ

樋浦 ゆりあ 一橋大学大学院 社会学研究科 博士課程

本稿は、2025年4月23日に開催された先端課題研究23「〈面白い〉研究の研究——規格不能性と向きあう」において、赤嶺淳が報告した内容をまとめるとともに、赤嶺が論じたアナ・チンの『マツタケ——不確定な時代を生きる術』（以下、『マツタケ』）におけるスケラビリティ／ノンスケーラビリティを、執筆者自身の研究に引きつけて議論することを目的とする。

1. 赤嶺＋チンの近代の語り方

赤嶺報告を2部構成で切り分ける。第1部に序論としての研究動機と『マツタケ』、第2部に捕鯨産業の変遷と分割して要約する。

発表ではまず、赤嶺がモノ研究をはじめた経緯が語られた。モノ研究のパイオニアたる鶴見良行の研究——鶴見ワールド——に魅了され、鶴見と差別化させたナマコ、続いて鯨を研究対象にしてきた。赤嶺の研究方法は、ディシプリンを気にせずに先行研究をまたぐことであり、フィールドワークやライフヒストリーの聞き取り、新聞記事や歴史学の二次文献なども多用している。次に自身が翻訳したチンの『マツタケ』を批判的に検討した。赤嶺は、チンが『マツタケ』で歩いた場所を追体験する過程で、方法論を盗もうとした、という。資本主義のあり方をマツタケ（モノ）の不確定さから論じたチンの問題意識に共鳴しながら、捕鯨の変遷と現在進行中のマーガリンの社会史の執筆構想を通じて「近代」を語ろうとしている。

捕鯨の変遷では、「近代」を象徴する捕鯨産業の歴史的変遷を再解釈し、今後の展望を描くことを目的とした。捕鯨産業の歴史を油脂生産に焦点し、かつての主要原料であった鯨油なき現在のマーガリンの社会史を今後の課題に据えている。有機栽培された原料を用いたり、ヴィーガン用であったりと、マーガリンは、いまやバターの代用品以上の商品であるという。赤嶺の視野は、日本の捕鯨船団が南氷洋に出漁した昭和初期から世界の鯨油市場が崩壊した1960年代中葉までの鯨油市場の変化を捕鯨業という搾取型経済の限界、その後の植物油脂によるプランテーション経済への移行との関係性として捉えようとしている。

2. 『マツタケ』の要点の整理

『マツタケ』は、21世紀のグローバル資本主義や進化を自明とした「近代」という、明日が見通せない不確定な状態で、マツタケの生き方・世界観(マルチスピーシーズ・ワールド)、サプライ・チェーン経済に着目し、いかに新しい共生関係を構築できるかを問い直すマルチスピーシーズ民族誌である。日本やアメリカ合衆国、フィンランド、中国と地域を横断したスケールの大きな研究である。『マツタケ』の主役であるマツタケは、日本の贈り物文化の高級品である一方で、アメリカ合衆国の採取される現場では移民や難民という周縁に生きる人びとによって採取されている。

『マツタケ』のキーワードは多くある。次に第3節を論じるための概念として、「スケーラビリティ(規格不変性)」と「ノンスケーラビリティ(規格不能性)」を『マツタケ』にそってまとめる。

「スケーラビリティ」とは、組織体制やプロセスが、その構造や質を変化することなく、スケールを大きくしても同じように機能する状態である。例えば、プランテーションやサプライ・チェーンの一部で、環境や地域の多様性・特殊性が無視される。

「ノンスケーラビリティ」とは、組織体制やプロセスが、スケールを大きくした際に不成立、または拡大自体を拒絶する状態である。例えば、マツタケのサプライ・チェーンのなかの採取する現場や、森林が再生していくプロセスであり、偶発性や混乱を招き、不確定で多様性がある。

3. 筆者自身の研究との接続

歴史を専門とする筆者の研究主題は、「ミックス」(混血)がどのように構築され、アメリカ合衆国という人種関係を基盤とした政治や社会において、いかなるカラーラインが引かれたのかを歴史的に問い直すことにある。その事例として、20世紀初頭ヴァージニア州に着目し、州公衆衛生局主導の「公的登録制度」(出生登録や死亡登録、結婚登録、離婚登録といった州管轄の制度を指す。アメリカ合衆国の場合、州ごとに法制度化され、現在も全ての州で州によって管理されている)の整備(1912年人口統計法の改正により開始)と、その後制定された人種保全法(ヴァージニア州で17世紀の植民地時代から続く「異人種間結婚禁止法」改正法で、アメリカ合衆国初の白人の法的定義および、出生登録の強制を目指したが実現を阻止された1924年制定法のこと。白人と白人ではない人種の結婚を禁止する「異人種間結婚禁止法」も州ごとに法制度化され、廃止や復活、制定されなかった州など様々にある)の2つを取り巻く社会を制度史を踏まえた社会史の観点から描き出すことをめざしている。

研究主題に取り組むにあたり、赤嶺のようにディシプリンを越える必要があると考える。修士論文では、史料から「ミックス」だと疑われる「痕跡」を探すエリート白人男性たちと、その「痕跡」を打ち消そうとする「被疑者」に着目した。しかし、白人や黒人(黒人新聞の記事)の残した史料のみに限って実証するという不均衡をそのまま描き出してしまった。

筆者は、史料の限界を越えるためには歴史学からディシプリンをまたいでみるのはどうだろうかと考えた。よって、以下では歴史学に位置しながら、ディシプリンを越境した先に見えてくる地平とは何か(結局、見えないままか、向かえないままに引き返す可能性もある)を検討する。赤嶺報告と『マツタケ』を踏まえた筆者の研究の議論が地平を見る呼び水としたい。

チンの議論する「自然」と「人間」の共生のあり方は、筆者の扱う「異人種間」と翻訳できる可能性がある。しかし、本稿では、「人種」とスケラビリティ／ノンスケラビリティに絞って議論する。

まず本節では、「人種」(race)という概念のスケラビリティとノンスケラビリティを検討する。「人種」という概念は、筆者の研究にとって最重要な概念である。歴史学では、構築されたカテゴリーだと理解しながらも、「人種」の構築性を疑うことなく、それを前提としてきた。例えば、1960年以降の多文化主義の影響を受け、黒人、エスニック・マイノリティ、先住民などを主体として語られてきた。また、白人性研究でも、「白人であること」がどのように構築され、権力関係との結びつきを議論するものの、対象は「白人」であった。「白人」として歴史的に認められない時期のあったアイルランド系やイタリア系、東欧系を取り上げて意識化・可視化することにより、黒人史と同じように主体が浮上している問題がある。

本稿では、「人種」という概念のこれまでの理解をスケラビリティとし、筆者の研究で検討する「人種」という概念の脱構築・再構築をノンスケラビリティと捉えてみたい。そして、「人種」の構築性とそのプロセス自体が歴史的、地域的、文脈的に異なる形で展開されているため、スケラビリティだけではなく、ノンスケラビリティとして理解されるべきであると主張したい。

「人種」とは、生物学的実態ではなく、社会的な構築概念である、と理解される。それはある種の歴史性を持ちつつも、構築物としてスケラブルに拡大する。例えば、文化人類学者の竹沢泰子は、「人種概念の包括的理解に向けて」において、「人種」を「小文字の race」、「大文字の Race」、「抵抗の人種 Race of Resistance」と3つに分けて議論した。竹沢は、「小文字の race」の説明に前近代の「社会分化した集団の差異」が「明瞭な優劣や排除を伴って政治・経済・社会制度に表現される場合」のことと定義し、「単なる偏見が、制度化された差別を伴う race へと転化する要因としては、まずなにより労働や宗教・政治面における制度的変化が考えられる」(竹沢 2005: 29)と論じる。「大文字の Race」の説明に近代の「世界中の人々のマッピングと分類を意識して構築された科学的概念として流通する人種」であり、「国民国家形成、植民地主義などの文脈で、それぞれの社会において独自の展開を見せる」(竹沢 2005: 29-30)と述べた。最後に「抵抗の人種 Race of Resistance」の説明に「アイデンティティ・ポリティクス」のように、「支配への抵抗、独立運動やマイノリティ運動などのなかで、それぞれの社会で劣位の人種とされた様々な集団の抵抗を呼び覚ます」(竹沢 2005: 31)と考える。

竹沢による、これらの3つ位相は、個々に独立しているのではなく、「個々

の位相のなかに重層性、多様性、可変性が見出され、さらにそれら3つの位相は人種概念というひとつの球をなすように相互に関連している」(竹沢 2005: 28)という。さらに人種概念が非普遍的で人類史において点在し、支配集団と被支配集団の双方が道具とする概念で、現在と過去の類似性を暗に示すという意義を主張する。そもそも竹沢は従来のアカデミズムによる人種概念自体が、狭義の概念に留まってしまったために、概念に収まらない現象を「人種差別」として認識することを困難にし、結果としてその現象を容認し再生産していると警鐘を鳴らした。例えば、竹沢によれば「人種差別」という概念が黒人差別をイメージさせることにより、日本国内の外国人や被差別部落に対する排除は「人種差別」に値しないという政府見解が挙げられる。その問題意識により、竹沢は「人種差別」という現象とその対象のスケールを広げるために人種概念のスケールを拡張させた。「人種」の構築性の内実を包括的に理解し、それぞれの歴史的経緯に当てはめて機能させることができるスケーラビリティである。

しかし、「人種」は差異や排除をもたらす道具である一方で、「人種」の構築のプロセスにはノンスケーラビリティのような歴史的特殊性や不確定性がある。例えば、ヴァージニア州では、「人種」不確定な人びとが多くいるとされた。しかし、どのような「人種」であるかの特定に困難が生じた。家系図は限られており、制度も整っていない状況で、「人種」が不確定性であるからこそ、公衆衛生局は優生学運動と同じ論理を使って州主導の出生登録と死亡登録、結婚登録、離婚登録といった「公的登録制度」を人口動態統計法の制定後(出生登録と死亡登録は1912年、結婚登録と離婚登録は1918年)に開始した。しかし、公衆衛生局の目標とした全州民の登録はできなかったため、別の道具を使って「人種」を「客観的」構築させなければならなかった。1924年に新たに「人種保全法」を制定させ、全州民の「人種」をカテゴリーとして記録しようとした。人種保全法の強制記録は失敗したが、就学や結婚、徴兵といったライフコースのためには出生登録が必要だとし、疑わしい者には公衆衛生局長の名前で手紙を送った。ヴァージニア州では、様々な場面で「人種」が、ある一定の場の「知」によって確定される。法的定義だけではなく、時には情動が利用されていた。「人種」は、曖昧であり、確定していたはずの者たち(白人議員として生きてきたエリート男性は、人種保全法制定が「白人」ではないと証明されてしまうことに激怒した)にも不確定さを与えていた。

以上、「人種」の構築性とそのプロセスが、人・集団・時代・制度・文脈によって多様な形で展開された。竹沢は3つの位相のうちの「大文字の Race」が「民族」や「部族」といった異なる名づけの概念を「人種」分類に包含した「分類法則の普遍性」と、個別の社会では「人種」が単なる西洋の輸出品ではなく、国民国家形成や植民地主義などの文脈で独自の展開をみせる「コピーのオリジナリティ」といった普遍性と個別性の双方を持つとしている。しかし、竹沢は個別社会の独自性にも着目するとしながらも、竹沢の問題意識から人種概念の普遍性をグローバルな視座で包括的に理解することに重点を置いているため、コピーのオリジナリティが構築するプロセスにスケーラビリティが見出される。

さらに、人種概念は構築されていると論じながら、位相や法則のために「人種」を構築するという一種の矛盾を抱えてしまっている。「人種」を構築することで本質的な「人種」が存在するように立ち現れる。とはいえ、「人種」を「見ない」ことは、人種差別の現象を否定し、現代の政治的文脈からカラーブラインドという批判がなされる。特に、3つの位相の「抵抗の人種 Race of Resistance」にとって、「人種」の否定は人種差別の否定へと繋がるからである。つまり、「人種」は支配集団から単に押しつけられただけではない戦略的な道具である。しかし、「人種」を「見ない」のではなく、「人種」を「見る」とは何かを考えたい。構築しないままに構築を問い直すことは、「人種」を否定して実態を矮小化するカラーブラインドとは異なる。ノンスケラビリティのスケールの不成立および、拒絶や不確定性は、「人種」という一種の分類それ自体が作り上げてきた本質と見せかける構築性を明らかにするだろう。ヴァージニア州の人種秩序に揺れる社会は、「人種」だけでなく、ジェンダーやセクシュアリティ、階級をも伴った“ミックスな社会”である。「白人」を疑われた人びとは、身体および、血統だけではなく「人種」を証明する「痕跡」があると見なされた。一方で、「白人」を疑われた人びとも、自らの「人種」を証明する「痕跡」を提示や消去を行った。そのノンスケラビリティなせめぎ合いこそ、「人種」の構築性の証左であろう。「人種」の構築性と人種概念に関して、スケラビリティだけではなく、ノンスケラビリティとして理解することでオルタナティブな人種概念の議論が可能になるだろう。

4. 結論

本稿では、赤嶺報告および『マツタケ』を基に、ディシプリンの越境がいかに既存の枠組みに揺さぶり、新たな知的地平を切り開く可能性を秘めているかが明らかとなった。そのうえで、筆者の研究主題である「人種」という概念のスケラビリティとノンスケラビリティの両側面を検討することで、これまでの歴史学的アプローチでは捉えきれなかった「人種」の構築性のプロセスの不確定性や流動性が照射された点に本稿の意義がある。以下、各節をまとめ、結論を示す。

まず、赤嶺報告に見られるように、対象をモノとしながらも、その背後にある社会構造、歴史的背景、制度、そして感情の層にまで踏み込むことで、物質文化研究を単なるモノの歴史記述にとどめず、動的な社会分析へと転換させることが可能である。特に赤嶺のディシプリンを越ようとする姿勢は、筆者自身の研究姿勢にも深い示唆を与えており、従来の歴史学の方法だけでは捉えきれない「人種」概念の不確定性への接近を可能にしている。

一方、チンの『マツタケ』におけるスケラビリティとノンスケラビリティという概念枠組みは、自然と人間、資本と共生、制度と偶発性といった二項の対立を乗り越える分析ツールとして有効である。これを筆者の研究の重要概念である「人種」に適用することで、「人種」が固定的・規格的な社会的枠組み

としてスケーラブルな機能しつつも、その構築過程において多くのノンスケーラブルな不確定要素が絡むことが明らかとなった。とりわけヴァージニア州の制度史において、「人種」の確定がいかに困難であったか、またその困難さが「制度的暴力」を誘発したことは、ノンスケーラビリティの構造的な重要性を浮き彫りにしている。

さらに、本稿では「人種」が生物学的実体ではなく社会的構築物であるという認識を出発点としつつも、その構築プロセス自体が時代・制度・文脈によって異なる形で展開されること、すなわちスケーラビリティだけではなく、ノンスケーラビリティとして「人種」を捉えるべきであることを示した。このような視点は、「人種」が一貫した定義や枠組みで理解されるべきものではなく、むしろ常に不確定で、更新され、争われ、再配置される過程であるという理解を可能にしてくれる。

本稿が提示した結論は、ディシプリンの越境によって生まれる知的刷新の可能性と、「人種」という概念に内在するスケーラビリティとノンスケーラビリティの複合性を浮かび上がらせた。そして、筆者自身の研究においても、制度史と社会史を交差させつつ、史料的限界を乗り越え、新たな記述の地平を目指す取り組みとして大きな示唆を持っているといえる。

参考文献

- Tsing, Anna Lowenhaupt, 2015, *The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*, Princeton: Princeton University Press. (赤嶺淳訳, 2019, 『マツタケ——不確定な時代を生きる術』みすず書房.)
- 竹沢泰子, 2005, 「人種概念の包括的理解に向けて」, 竹沢泰子編, 『人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを越えて』人文書院, 9-109.
- 樋浦ゆりあ, 2023, 「ムラトーたちの「痕跡」——アメリカ合衆国ヴァージニア州における人種保全法・出生登録・優生学運動とミックス／混血」一橋大学大学院社会学研究科2022年度修士論文.

『マツタケ』マニフェスト、ふたたび

赤嶺 淳 一橋大学大学院 社会学研究科教授

以下は、Balat's Office と題した、わたしの個人ウェブページのトップに掲載していた文章です。balat (バラット) とはフィリピン諸語でナマコ類を指す単語です。

「ナマコ研究室」なるウェブページを開設したのは、人生初となる単著『ナマコを歩く』が出版された2010年5月のことでした。研究成果はもちろんのこと、研究活動を支えてくれる研究助成を公開し、調査研究の責任を明示しようと考えてのことでした。現代風にいえば、調査倫理の一環として研究に関する情報を開示する、ということになります。

2021年1月には、10年たったということもあり、また Covid-19 で研究スタイルの変更を余儀なくされたこともあり、ウェブページの衣替えを実行いたしました。その後、科学技術振興機構のresearchmap や一橋大学のリポジトリなどの諸媒体が整備されたことから、「ナマコ研究室」は2025年3月末に閉じました。

しかし、わずか4年強の寿命となった『『マツタケ』マニフェスト』だけは、どこに残しておきたいと考えていたところ、さいわいにも本誌の『マツタケ』特集号に拾ってもらえました。ふたたび、日の目を見る機会を与えてくれたことに感謝しています(タイトルの「歩いては読み、読んでは歩く」は、再録に際してあらたに附しました)。

歩いては読み、読んでは歩く

10年ぶりにホームページを一新いたしました。厄払いというつもりはありませんが、コロナ禍で変容をせまられた研究活動をうけ、心機一転、衣替えというわけです。

海域世界研究を標榜し、これまで「水産資源の保全と利用」について研究してきました。基本はフィールドワーク。犬も歩けば……のごとく、調査にできれば、なにかしらの発見があり、研究の広がりを実感できるものです。しかし、研究

カナダ産アメリカマツタケと
中国産マツタケ(2016年10
月、名古屋市内のスーパーで
筆者撮影)。



の深化という点では、物足りなさを感じていたことも事実です。

そんなモヤモヤ感を自覚し、路線修正へと舵を切るきっかけとなったのは、アナ・チンさんの『マツタケ』との出会いでした(いまふりかえっても、チンさんの教養あふれる語りと、計算しつくされた幾重もの仕掛けを、訳出しきれたかは疑問です)。「おなじモノをあつかっているのに、この『思考の深さとスケールの大きさの差』は、何なのか」。翻訳中、幾度となく自問したことです。

決定的な違いは、近代を近代たらしめているもの——資本主義——への洞察の有無にあります。わたしはモノを追っかけることに精一杯だった(し、それを楽しんでいた)わけですが、チンさんが追求していたのは「モノを動かすシステム」なのであって、モノへの着眼はその手段だった、ということです。

世界の人類学研究を牽引するチンさんですが、それでもマツタケ研究に着手するにあたっては、一夏すべてを文献調査に充てた、と断言します。そんなチンさんの姿勢に学ぶつもりで、コロナ禍の2020年、わたしも「読む」作業に傾注し、研究を構想しなおすことにしました。

たとえば捕鯨。現在でこそ鯨肉消費をめぐる問題——ときとして伝統か否か——として議論されていますが、世界史的には鯨油という産業革命をささえた商品を生産する産業でした。その後、石油化学工業が発展するとともに灯油や潤滑油としての需要は蒸発したものの、20世紀にはいるとマーガリンや石鹸の原料としての需要によって息を吹きかえます。液体である鯨油をマーガリンなり石鹸なりに固形(硬化油)化する過程でグリセリンが生成されますが、そのグリセリンがダイナマイトの主原料たるニトログリセリンを派生するというように、鯨油は軍事的戦略物資でもあったのです。

鯨油はヤシ油やパーム油、大豆油などと競合関係にありました。そんな鯨油の

強みは、(南極の夏がおわる)北半球の春に大量供給されることにもありました。興味深いのは、戦前期、日本は鯨油をヨーロッパに輸出する一方で、「生命線」たる満洲から大豆粕を輸入していたことです。この事実は、なにを意味しているのでしょうか？

まだ展望は開けていませんが、捕鯨問題群の研究を深めることによって、富国強兵・殖産興業のスローガンのもと、近代化を追求してきた日本国家の成りたちを解明することができる、と踏んでいます。これまでのナマコ研究とクジラ研究を、大地(プランテーション)にも目配りした「地球大の資本主義」の視点から捉えなおすこと、それが今後の課題です。

2021年1月



ポートランド在住の日系米国人の憩いだったフッド山のマツタケ(2017年11月、筆者撮影)。

編集後記

今号は記念すべき2巻2号——通算3号——となりました。昨年度は創刊するのが精一杯で、1号を刊行できただけでした。今年度は7月に「2024年度自己評価」を綴った2巻1号を刊行しています。ときをおかずして、こうして『マツタケ』特集を送りだせることは、うれしいかぎりです。

本誌は、そもそも教員と学生をはじめ、さまざまな境界を越えることを目的としています。とはいえ、今号も先端課題研究23をベースとする、教員主導の企画にすぎません。次号も、その延長上の企画となるはずです。同人誌とはいえ、せっかく媒体をもっているわけですから、いつの日か、院生主導の企画が続出することを、楽しみに待ちたいと思います。

わたし自身も経験したことですが、若いころは、なかなか文章を発表する機会がないものです。たまさかの機会だからこそ、つい気負ってしまい、文章が背伸びしすぎてしまったり、ぎこちなかったりするものです。大学院生のみなさんには、読み手を意識し、読み手に配慮した、自分自身の文体を構築していつてもらいたいと思っています。『きわ』が、そうした文章修業の場となればさいわいです。

2025年9月

『きわ』編集委員会

赤嶺 淳・小泉佑介・根本雅也